

## テーマ 信そして行を問う

改めて「信」とは、念仏の「行」とは、どのようなことか考えてみたい。

我々は、自らの合理的考えに基づき納得出来なければ何事も信じるという訳にいかないというのが一般的であろう。ましてや念仏を称とえることなどできない。つまり我々の信(信じるということ)の多くは、自らの思考回路を成り立たせる知的理解を切り離せず、そして行い(念仏すること)はその知的理解と伴って出る。

しかし、このような自力の信では無量と無限の阿弥陀の絶対性に通じない。ここにおいて、自らの知的理解を超えることき阿弥陀より差し向けられるという信、そして行が案じられてくるのである。

そこで親鸞聖人の『教行信証』である。そこには、阿弥陀より差し向けられた信と行を「大信」「大行」と戴いたかれているのを窺うかがう。これによつて我は、私の信と行さえも包み込む大いなるはたらきに出遇い、先ず眼前に為しうる行に直面する。我はただその行を為してゆかねばならぬ。この行の連続無窮(連続して途切れない)が阿弥陀からの信を確実にする。

実はその行とは、我々の今の労苦する生活に他ならない。念仏の行はその労苦そのものの上にある。しかるに、その労苦の続行に労苦を超えしむ絶対の信が成り立っていることを『教行信証』に記すことをもって保証していると思うのである。

中村区(以速寺)梅原博